



頼りになるラジオ

災害の時、頼りになるのがラジオです。地震などで停電になるとテレビからは情報が得られないことがあります。電池式の携帯ラジオならいつでもどこでも聞くことができます。避難する時にも手軽に持ち出すことができます。狭い避難所でも場所をとりません。被災地では、生活に欠かせない情報をラジオから得ていたという話が多くの人から聞かれました。普段から手の届くところにラジオを置くか、非常持ち出し品をまとめた袋の中にラジオも入れておきましょう。予備の電池も忘れずに用意しておいて下さい。

飲み水の備え

日頃から家に飲み水を備えておきましょう。人が生きていくためには1人1日およそ3リットルの水が必要とされています。断水しても3日間持ちこたえれば、給水車などで水が供給されるようになりますといわれます。最低3日分の水を用意しておけばよいでしょう。4人家族の場合、3日分で36リットルの水が必要です。市販のペットボトルを買い置きして冷暗所に保管するのもひとつの方法です。賞味期限があるので期限が近づいたものから使って買い足していくとよいでしょう。

水の汲みおき

飲み水だけでなく、トイレや洗い物に使うための水を風呂などに汲みおきしておきましょう。淡路大震災では、水道が元通りに復旧するのに地域によっては3か月かかりました。飲み水は給水車で手に入りましたが、生活に使う水は手に入れるのが大変でした。風呂桶にまとまった量の水を汲みおきしておくとも断水になってもあわてずすみません。残り湯でもトイレなら十分利用できます。ただし、風呂桶にはふたをして、小さな子どもが水に落ちないように注意してください。

非常持ち出し袋

日頃から非常持ち出し品を準備してリュックサックやかばんにつめておきましょう。避難時に支障のない重さは成人男性で15キロ、女性では10

キロほどです。中に入れておくのは缶詰などの非常食で目安は家族3日分。飲み水は1日1人3リットル。大事な情報源のラジオ、懐中電灯、予備の電池も必要です。衣類、毛布。傷薬や常備薬。手袋、ティッシュ。家庭によっては、おむつやミルク、離乳食。眼鏡やコンタクトレンズの保存液。貴重品も、いざという時に持ち出せるよう日頃から整理しておきましょう。

役に立つ10円玉

大きな災害がおきると、大勢の人が一斉に電話を利用するため、一般の電話や携帯電話の回線が混雑して通話が制限され、電話が繋がらないことが予想されます。この時、有効なのが公衆電話です。公衆電話は災害の時には優先的につながるようになっていきます。一般の電話や携帯電話が繋がらない時は公衆電話を利用して下さい。ただし、停電の場合は、カード式の公衆電話は使えなくなることがあります。そういう時でも10円玉は使うことができます。非常持ち出し品の中に10円玉を入れておくと役に立ちます。

ヘルメットとずきん

地震の時には、家具が倒れたり、棚の物や照明器具が落ちてくる危険があります。家の外では屋根瓦や割れた窓ガラス、看板も危険です。大きな地震の後は余震にも備えてヘルメットや防災ずきんをかぶりましょう。ヘルメットはオートバイ用や作業用の物が使えます。東海地震に備える静岡県では、肩からひじのあたりまで届く防災ずきんが普及しています。また薄手の座布団を二つ折りにして防災ずきんを作ることができます。

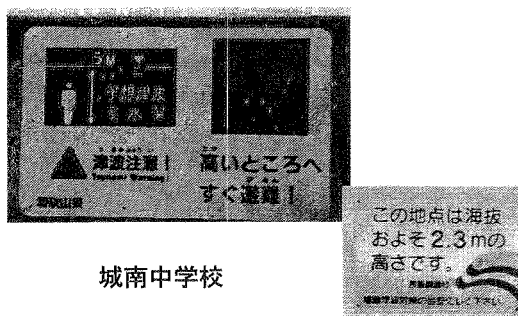
消火器

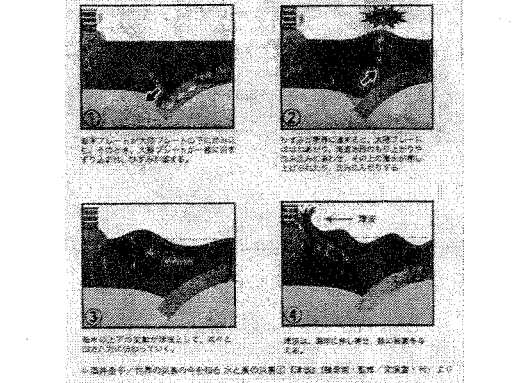

地震でこわいのが火災です。火事になっても直ちに消し止められるよう消火器を備えておきましょう。1軒に2~3本用意して、家の中に分散して置いておくのが理想的です。いざという時、だれもが使えるよう説明書をよく読んでおきましょう。てんぷら鍋に火が入った場合は、いったん壁にぶつけて、はね返った消火剤が鍋に入るようにしたり、上向きに消火剤をまいて炎を覆うようにかけるのがコツです。消火器の有効期限はおよそ5年。メーカーに問い合わせれば中身の詰め替えと点検を行ってくれます。

家族との連絡方法

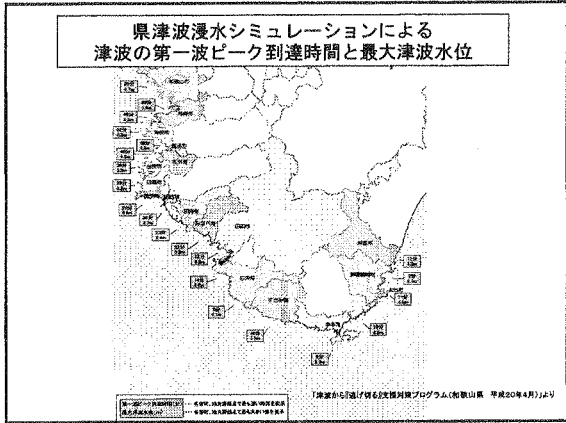
いざという時、家族の安否を確かめるための連絡方法を考えておきましょう。大地震の時は交通機関がとまり、電話もかかりにくくなることを前提に、集合場所を決めたり、遠く離れた親戚や知人の家を連絡先にしておいたりするルールを作っておきましょう。とくに子供とどう合流するかは重要なポイントです。学校や幼稚園などでは、迎えにきた家族に子供を引き渡したり、集団下校を行ったりします。あらかじめそれぞれの学校や幼稚園にどんな方法をとるのか確認して、お子さんにも話しておきましょう。

和歌山県防災教育1



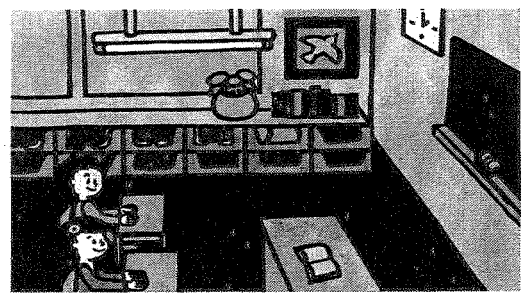



© 酒井圭子 / 世界の災害の今を知る 水と風の災害②「津波」(藤田浩一監修・文芸堂・刊) より

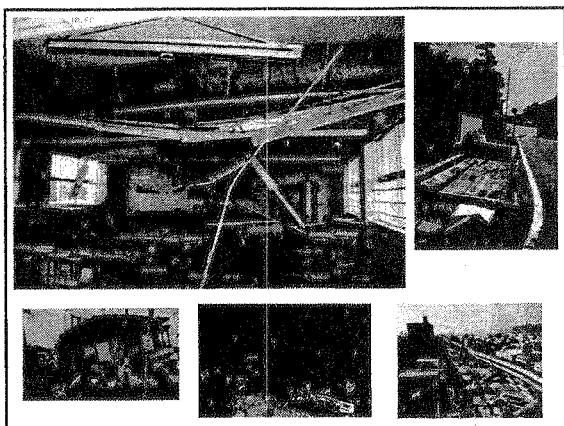


下表は経験的に求められた津波の高さによる津波形態と被害程度分類です(単位:500m間)

津波の高さ(西)	1~2m	2~4m	4~8m	8~32m
木造家屋	部分的破壊	持ちこたえらる	全面的破壊	全面的破壊
鉄筋コンクリートビル	持ちこたえらる	部分的破壊	部分的破壊	全面的破壊
漁船	被害停止	被害率50%	被害率100%	被害率100%
防波林	被害軽減、津波物阻止	部分的被害、津波物阻止	全面的被害	無効果
養殖施設	被害発生	被害発生	被害発生	被害発生
沿岸集落	被害発生	被害率50%	被害率100%	被害率100%



- 電灯が落ちる
- 教卓が倒れる
- ガラスが割れる
- 絵が落ちる
- 時計が落ちる
- 本が落ちる
- 花瓶が落ちる



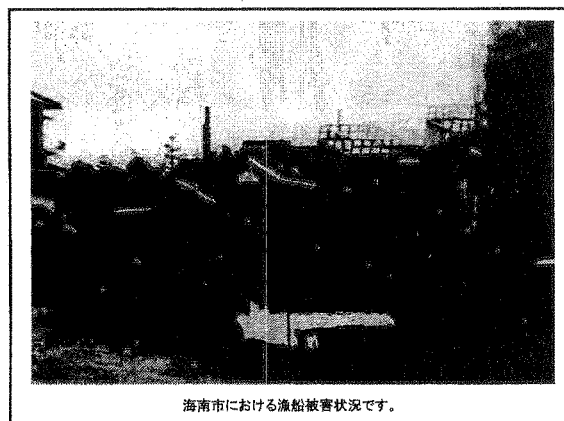
学校や家庭で考えられる被害状況

- ものが落ちてくる。
- ガラスが割れる。
- 家が倒れる。
- 崖崩れが起きる。
- 火事が起こる。
- 道路や段差に地割れができる。
- 電気やガス、水道が止まる。
- 本棚やタンスなどが倒れる。
- ピアノが動く。
- 塀が倒れる。
- せまい道はふさがれる。
- 津波が来る。

1946年(昭和21年)12月21日
 紀伊半島沖を震源とする
 昭和南海地震津波が発生
 和歌山県、徳島県、高知県沿岸は
 大きな被害を受けました。
 以下は、被災直後の和歌山県下の
 被災状況を記録した写真です。



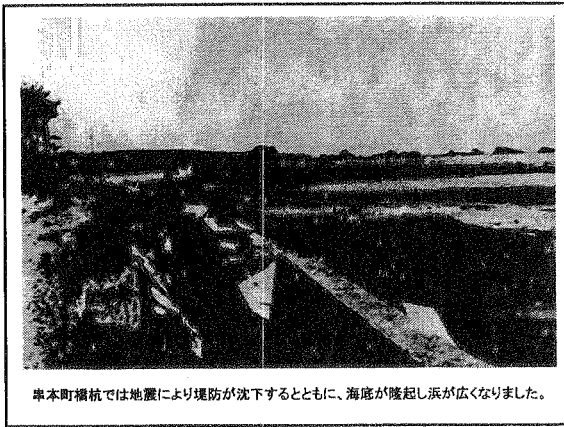
田辺市新庄にある紀伊本線紀伊新庄駅付近の状況です。



海南市における漁船被害状況です。



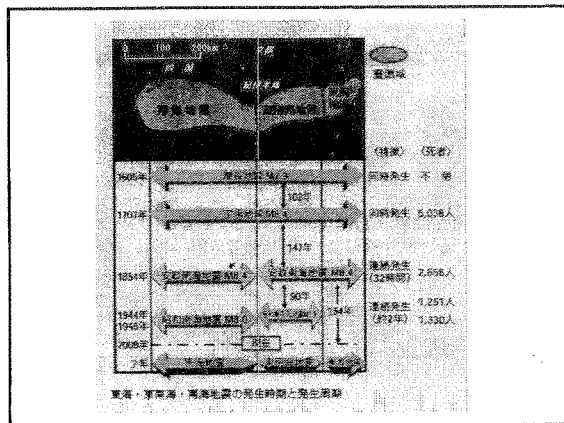
湯浅町の川を遡り陸に打ち上げられたまま取り残された漁船の写真です。





同じく新宮市。火災により多くの家屋が焼失しました。

紀伊半島に いつ巨大地震が来るか！？



<h3>東南海、南海地震</h3> <p>(東南海と南海地震が同時発生を想定)</p> <p>M8.6 地震の揺れる期間は1~2分</p> <p>死者17800人、全壊建物62万8700棟、 経済的被害57兆 津波の被害(前回:東南海12m 南海6m)</p> <p>四国、近畿、東海全域</p> <p>発生確率30年以内40%、50年以内80%</p>	<h3>東海、東南海、南海地震</h3> <p>(東海、東南海、南海地震が同時発生を想定)</p> <p>M8.7 瀬戸沖~足摺沖を震源、 伊予川口~宮崎県の範囲で震度6弱以上。</p> <p>死者24700人、全壊建物94万2000棟、 経済的被害81兆、 高知県では津波が10メートル以上、 紀伊、四国では津波が5メートル以上。</p> <p>東海~九州太平洋側全域</p> <p>(東海:発生確率30年以内84%) 東南海、南海地震が発生する事によって、 東海地震の同時発生の可能性あり</p>
---	--

防災教育2

年 組 番 氏名

1. 津波避難3原則を書いてください。
わからないひとは裏面に答えがあります。

「
」

「
」

「
」

2. 津波浸水予想図はあったほうがいいですか？ないほうがいいですか？
記号に○をつけて理由を書いて下さい。

ア. ある方がよい イ. ない方がよい ウ. わからない

(理由)

3. 今日の授業の感想を書いて下さい。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

想定をはるかに超える大津波に襲われながら、両校の児童生徒が全員無事であったことは、新聞でも大きく報道されました。

3月11日、釜石市は**最大遡上(そじょう)高19・3メートル**(土木学会調べ)の津波に襲われ、**死者・行方不明者が1100人を超えた**。ただし、市内の小中学校生2926人のうち亡くなったのは5人。99・8%が生き延び、いつしか「釜石の奇跡」と呼ばれるようになりました。

「津波が来るぞ」。ただならぬ激しい揺れが収まると、大声を上げながら**最初に走り出した**のは、部活動などでグラウンドに出ていた**生徒**たちだったそうです。

3月11日午後2時46分、**マグニチュード9の巨大地震**による激しい揺れで、岩手県の**釜石市立釜石東中学校の校内放送は停止**したため、「逃げろ」という先生たちの指示は伝わりませんでした。

しかし、先頭切って駆けだした生徒たちを追うようにして、校内にいた生徒たちも**避難場所に指定されていた高台のグループホーム**を目指して走り出しました。

隣接する鵜住居(うのすまい)小学校の児童たちも、校舎の中にとどまってはいませんでした。これまでも**合同避難訓練**に取り組んできた中学生たちが高台を目指す姿を見ると、階段を走り降り、校舎を飛び出してその後を追ったのです。

そして、互いに励まし合いながら、高台を目指して子どもたちが走り去って間もなく、**釜石東中、鵜住居小の校舎は津波の直撃**を受けました。間一髪だったのです。

釜石東中、鵜住居小にとどまらず、釜石市内では約3000人の小中学生のほとんどが押し寄せた巨大津波から逃れて無事でした。この「奇跡」を支えたのが、「**想定を信じるな**」「**最善を尽くせ**」「**率先避難者たれ**」の「**避難の3原則**」。同市で**防災教育**の指導にあたってきた群馬大学教授の片田敏孝さんが提唱し、小中学校の先生たちと一緒に子どもたちに教え続けてきました。

片田教授の元々の専門は土木工学。防災教育と本格的に向き合うきっかけとなったのは、**2004年のインド洋津波**の被災地調査に参加した時に目の当たりにした光景だったそうです。

犠牲者約23万人という数字だけでは表すことができない惨禍に戦慄し、思ったそうです。「**日本で起きると、大変なことになる**」。そして、「子どもたちを決して死なせてはならない」という片田教授と先生たちの思いが、子どもたちの頑張りにつながり、「奇跡」を起こしたのです。


世界で起きる**マグニチュード6以上の地震の約2割**が、国土面積が世界の0.25%に過ぎないこの島国に集中しているという現実から、私たちは逃れることはできません。専門家の知恵と知見が、全国にくまなく張り巡らされた教育というパイプを通じて地域に注がれば、地域の、そして日本列島全体の防災力は、着実に向上していくはずです。

「奇跡」を起こした教育を、一刻も早く全国に広げ、「奇跡」の「**日常化**」を図っていかなければなりません。
《新聞記事より》

和歌山県防災教育2

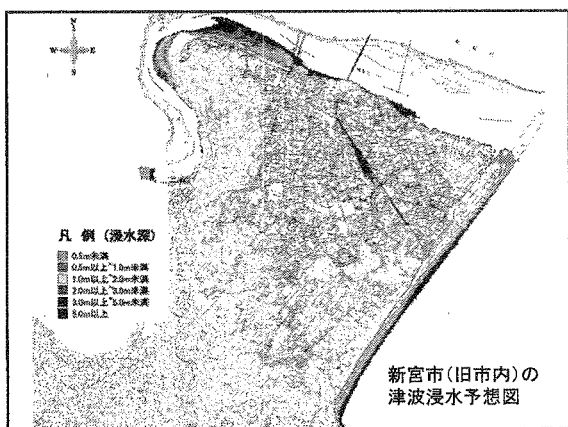
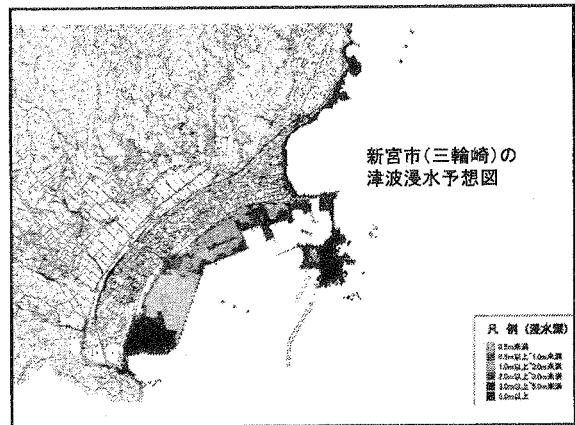
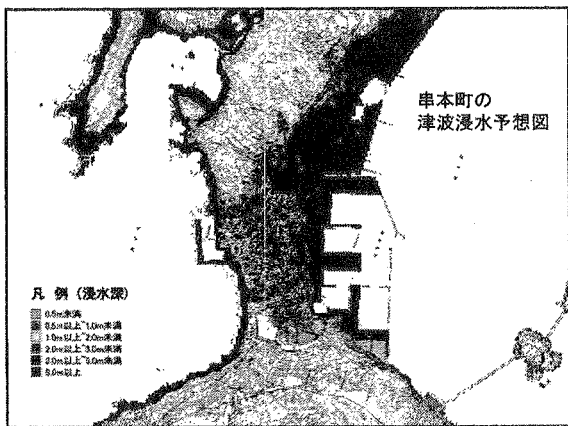
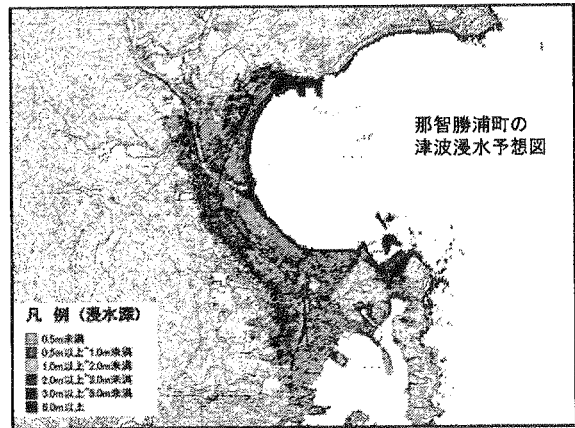
津波避難ビル

津波が来ても
だいじょうぶなビル



近くに津波避難場所が
あります

城南中学校



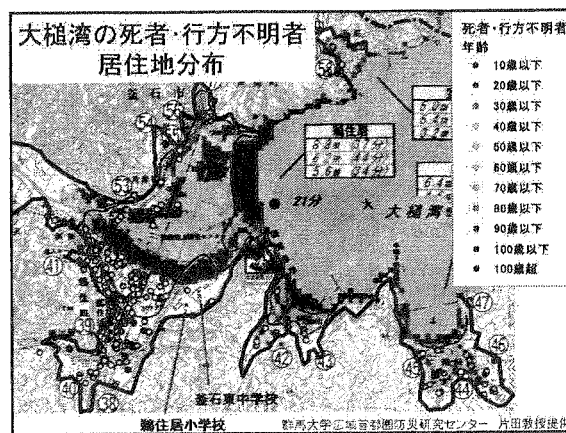
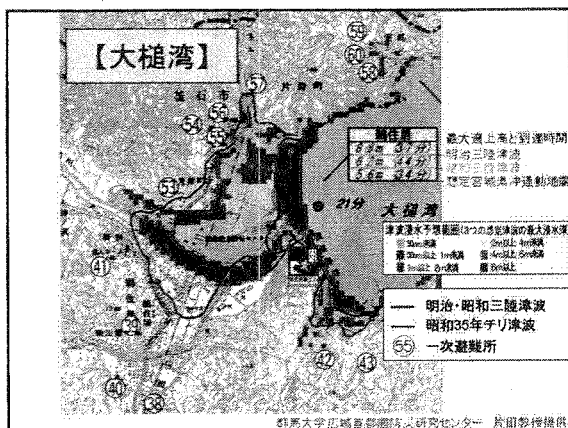
和歌山県内の津波浸水予想図は、
マグニチュード8.6の東海・東南海・南海地震が
同時発生し、津波が来襲した場合を想定して
作成されている。

平成23年3月11日 午後2時46分

東北地方太平洋沖地震発生

マグニチュード9.0

(国内観測史上最大)

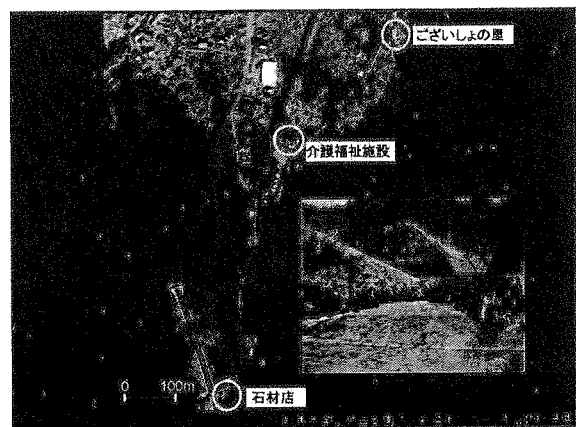
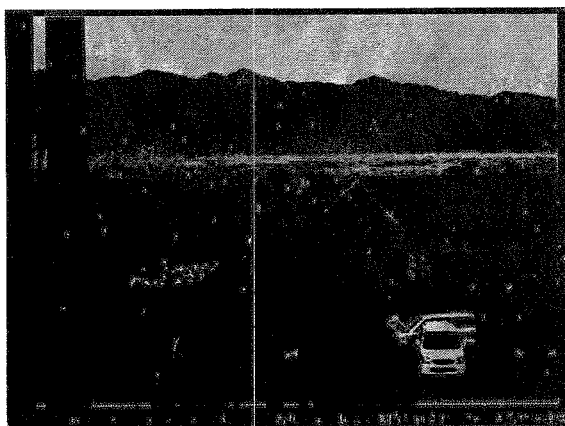
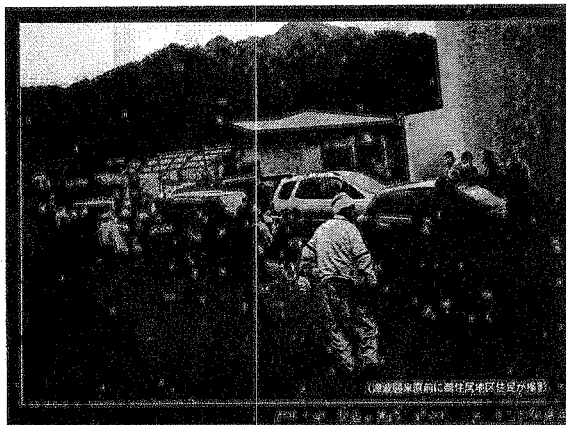
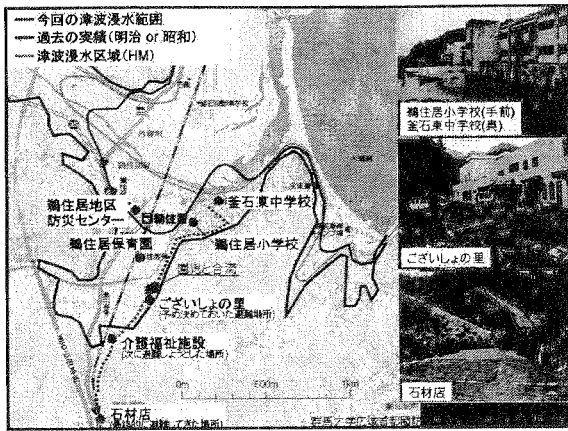


釜石東中学校と鵜住居(うのすまい)小学校は浸水予想範囲の外側にあります。小学校の校舎は津波で、つぎのような状態になってしまいました。当日、児童や生徒はまだ学校にいたそうです。この津波で、子どもたちや先生はどうなったと思いますか？



想定をはるかに超える大津波に襲われながら、両校の児童生徒が全員無事であったことは、新聞でも大きく報道されました。

3月11日、釜石市は最大遡上(そじょう)高19.3メートル(土木学会調べ)の津波に襲われ、死者・行方不明者が1100人を超えた。ただし、市内の小中学校生2926人のうち亡くなったのは5人。99.8%が生き延び、いつしか「釜石の奇跡」と呼ばれるようになった。



「津波が来るぞ」。ただならぬ激しい揺れが収まると、大声を上げながら最初に走り出したのは、部活動などでグラウンドに出ている生徒たちだったそうです。

3月11日午後2時46分、マグニチュード9の巨大地震による激しい揺れで、岩手県の釜石市立釜石東中学校の校内放送は停止したため、「逃げる」という先生たちの指示は伝わりませんでした。しかし、先頭切って駆けだした生徒たちを導くようにして、校内にいた生徒たちも避難場所に指定されていた高台のグループホームを目指して走り出しました。

隣接する職住居(うのすまい)小学校の児童たちも、校舎の中にとどまってはいませんでした。これまで何度も合同避難訓練に取り組んできた中学生たちが高台を目指す姿を見ると、階段を走り降り、校舎を飛び出してその後を追ったのです。

そして、互いに励まし合いながら、高台を目指して子どもたちが走り去って間もなく、釜石東中、職住居小の校舎は津波の直撃を受けました。間一髪だったのです。

釜石東中、職住居小にとどまらず、釜石市内では約3000人の小中学生のほとんどが押し寄せた巨大津波から逃れて無事でした。この「奇跡」を支えたのが、「想定を覆すな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」の「避難の3原則」。同市で防災教育の指導にあたってきた群馬大学教授の片田敬孝さんが奨励し、小中学校の先生たちと一緒に子どもたちに教え続けてきました。

片田教授の元々の専門は土木工学。防災教育と本格的に向き合うきっかけとなったのは、2004年のインド洋津波の被災地調査に参加した時に目の当たりにした光景だったそうです。

犠牲者約23万人という数字だけでは表すことができない惨状に黙然し、思ったそうです。「日本で起きると、大変なことになる」。そして、「子どもたちを決して死なせてはならない」という片田教授と先生たちの思いが、子どもたちの確信につながり、「奇跡」を起こしたのです。

世界で起きるマグニチュード6以上の地震の約2割が、国土面積が世界の0.25%に過ぎないこの島国に集中しているという現実から、私たちは逃れることはできません。専門家の知恵と知見が、全国にまくく振り回された教育というパイプを通して地域に注がれば、地域の、そして日本列島全体の防災力は、着実に向上してはいはずです。

「奇跡」を起こした教育を、一刻も早く全国に広げ、「奇跡」の「日常化」を図っていかなければなりません。

【新聞記事より】